HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地方都市における子育て家族の生活と資源 : 地域の移動タイプと追加的なケアに着目して [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	保田, 真希
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第13271号
Issue Date	2018-06-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/71521
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Maki_Yasuda_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名　　保田　真希

学位論文題名

地方都市における子育て家族の生活と資源

－地域の移動タイプと追加的なケアに着目して－

論文内容の要旨

本研究は、女性の貧困、特に、貧困とケア（ケアの担い方）との関係を考えるために行うものである。女性の貧困は多くの場合、女性が世帯主の場合に顕在化する。例えば、未婚単身女性、母子世帯、離別・死別によって単身となった女性・高齢期の女性等である。一方で、男性が世帯主の場合の貧困問題は見えにくい。ケアは人が生きていくうえで不可避なものであるが、ケア役割を担う人(多くの場合、女性)は、ケアを行うことで、稼得の機会が減少し、他者や国家・社会保障給付に経済的に依存した状態に置かれる。この状態を「二次的依存」という。ケアの担い手自身が稼ぐことができない状態は、稼ぎ手として生活を支える配偶者がいる場合には問題視されないが、仮に離婚をして世帯主になると、貧困の問題として顕在化する。ケアを行うことは「二次的依存」の状態に置かれやすいが、依存の程度や貧困のリスクには差がある。そこで、本研究の目的は、貧困とケアとの関係を考える前段階として、「二次的依存」・依存しなければいけない状況の中で、①どのように生活を営んでいるのか・資源の編成、②「依存」の様相を 3 つの聞き取り調査の内容を用いて実証的に検証することである。

「二次的依存」をめぐる議論は、実証的研究が少ない。あっても、女性の就業行動や家計調査による分析が中心である。そのため、実際の生活場面で考えるためには、どのような枠組みを設定し、「二次的依存」の検証を行うのかが難題である。そこで、本研究は「地方都市」に着目する。その理由は、2 つある。第 1 に、地域にある構造的資源の種類が明確であるため、個人がどのように資源を編成しているのかを把握するためである。第 2 に、「資源の限定性」を捉えるためである。資源の編成は、多様な資源の中で、取捨選択をするように見られるが、住んでいる地域で利用できるものから選ばなければならず、インフォーマルな資源による影響を受ける。本研究は分析枠組みとして、次の 2 つに着目した。第 1 に、地域の移動である。その際、「定住型」「U ターン型」「転入型」の 3 つの移動タイプに分類した。第 2 に、ケアの必要度(追加的なケアや配慮)である。実証的に考えるために、3 つの調査を実施した。調査結果を分析する際には、調査①(保育所調査)と②(子ども発達支援センター調査)を比較し、同じ地域的な条件のもとで追加的なケアの有無(ケアの必要度)によって資源の編成に何か特徴がみられるのかを考察する。次に、調査③は、調査②と同じ調査対象で地域を変えたものである。調査②と③により、地域の条件によって、資源の編成にどのような特徴があるのかを分析する。これにより、依存の様相を探る。

第 1 章では、子育て家族の資源の編成や、「依存」と「二次的依存」の概念的整理を行い、「二次的依存」を実証的に捉えていくための理論的枠組みを設定した。

第 2 章では、地方都市で保育所を利用して夫妻共に働いている家族への聞き取り調査(調査①)から、働きながら子育てを行うことを可能にする家族の生活様式・資源の編成を分析した。その結果、移動タイプによる資源の編成に特徴があった。第 1 に、移動タイプによ

って、社会的ネットワークの形成が異なる。「定住型」や「U ターン型」は主に実家・親族、「転入型」は主に公的な機関や友人などのインフォーマルなネットワークを構築していた。第 2 に、ケアの配分が女性に集中し、その負担の軽減は主に親族ネットワークに依拠していた。第 3 に、「転入型」や「U ターン型」の女性の地域移動の主な要因は結婚と仕事である。女性の U ターン、転入に関わる職業移動はケア労働に関係し、A 市の地域の労働市場を反映している。

第 3 章では、調査①と同じ町にある子ども発達支援センターに通う家族の聞き取り調査(調査②)から、子どもの特性とケアの配分や困難の特徴を分析した。その結果、第 1 に、「定住型」「U ターン型」は主に実家・親族ネットワークに依拠しているが、「転入型」は親族ネットワークに加えて、「ママ友」というインフォーマルなネットワークを構築していた。第 2 に、生活のサポートは、移動タイプによる差はなく、主に実家のサポートに依拠していた。「転入型」であっても、女性が時間を調整し、比較的移動可能な範囲に実家がある場合には、子どもを見てもらうことができていた。第 3 に、子どもに関わる時間と困難である。子どものニーズが見えにくい分、普段子どもと向き合っていない夫との間に不安や困難(妻への暴言・子をぶつ等)があらわれていた。

第 4 章では、子ども発達支援センターに通う家族への聞き取り調査(調査③)の結果をまとめた。その結果、主に 4 つのことが明らかになった。第 1 に、地域の移動タイプによる女性の仕事の違いである。結婚や夫の転勤により生活拠点が変わった「転入型」は、専業主婦が多く、自身の経済的基盤が喪失している。第 2 に、子どものニーズがわかりにくく、常に見守りや配慮を行う中で困難が見出された。第 3 に、家族内のケアの配分は、移動タイプによる違いと、「時間資源」「規範意識」の影響を受ける。女性が結婚前に非正規雇用や無職で生活が不安定であっても、交渉することで男性の協力が得られる場合があった。第 4 に、地域の移動タイプとサポートの有無である。「定住型」「U ターン型」では、サポートを得られていたが、「転入型」は誰からもサポートが無い場合があった。

第 5 章では、「資源の編成」と「依存の様相」を述べた。同じ地域であっても、ケアの必要度によって、資源の編成が異なる。ケアの必要度が似ていても、地域の条件や周りからのサポートの有無によって、資源の編成が異なる。第 1 に、労働市場・条件と地域移動である。地域の移動タイプによって、女性が現在就いている仕事が異なる。地域移動によって、女性は就労の断絶が起き、次の地域で就労できるか否かは、サポートの有無と、時間の融通が利く仕事による。すなわち、次の就労とインフォーマルなネットワークの形成である。第 2 に、「時間」と就業行動である。男性は妊娠・出産期の変化は見られない一方で、女性が仕事を調整していた。「転入型」の場合には、夫にあわせて生活拠点や働き方を変え、労働市場とのつながりが希薄化し、「二次的依存」の状態に置かれる。家にいる時間が多い女性がケアを担う。これはケアの専従化、非正規雇用に結びつく。第 3 に、「地域移動」と、追加的な配慮・ケアがクロスする時に、二次的依存のリスクを強める。

以上のように、「地域移動」や「追加的なケア・配慮」に着目し、資源の編成や依存の様相を検証したことで、いかに地域の資源・条件に縛られ、生活しているのかが明らかとなった。女性は、夫に付き添って「地域移動」をし、利用できる資源の変化や労働市場からの撤退、非正規雇用化につながる。これは、女性自身が単独で生活を維持するための経済的資源を有しておらず、「二次的依存」のリスクを高める。本研究はケアを担う／担わない・パワーとの相互作用が家族内の選択を規定するだけではなく、地域の条件によって「二次的依存」のリスクを高めることを明らかにした。